



英国国内旅行 ~National Trust~

最近ロンドン在住の日本人と話をしていて気になることがある。私は旅行会社に勤めているので、ビジネス、プライベート問わず仕事柄旅行の話になることが多い。そこで一番よく挙げられる話題は、いかに安く、効率よく飛行機でヨーロッパ旅行ができるかだ。

幸いロンドンは、ドバイに次ぐ旅客数世界二位のヒースロー空港をはじめ、LCC（格安航空会社）が発着するガトウィック空港、スタンステッド空港、ルートン空港、サウスエンド空港や、近距離路線を中心にビジネスマンがよく利用するシティ空港の計6つの空港が存在し、他国と比べて世界中の国々に非常に行きやすい土地柄であることは言うまでもない。

「旅は真の知識の大きな泉である。」これは19世紀の英国の首相ベンジャミン・ディズレーリの言葉である。彼の生涯と旅は密接につながっており、欧洲諸国はもちろんのこと、北アフリカも旅行している。

滞在先で知識を得たり、新たな発見ができることは旅の醍醐味であるのは間違いない。私自身も旅自体を否定するつもりは毛頭ない。しかし、何か足りない気がする。----- 英国国内旅行だ。

英國に住んでいるのに、なぜ英國を旅しないのか。大英博物館に行って世界のコレクションを見たり、ナショナル・ギャラリーで世界の絵画鑑賞に行ってみたりするのもいいが、せっかく英國にいるのだから、ロンドンを離れて国内旅行を楽しんでほしいと願っている。

私は、ナショナル・トラスト（National Trust）の会員になり、英國の様々な名所やガーデンを巡ることが趣味になりつつある。英國を旅することは英國の歴史的背景や美しい景色をいち早く知ることができる最善のツールである。今回はロンドン近郊にあるナショナル・トラスト所有の名所を2か所紹介し、眞の英國生活を過ごせる一助になればと思う。

Hughenden (ヒューエンデン)

ロンドンの北西バッキンガムシャー / ハイ・ウィカム (High Wycombe)。周囲を丘で囲まれた谷にある街だ。ロンドン・イーリングエリアからは、M40経由で1時間以内で行くことができる。この街の少し北に行ったところにヴィクトリア朝時代の邸宅、ヒューエンデン・マナー (Hughenden Manor) がある。ここは冒頭に触れたベンジャミン・ディズレーリが1848年から1881年まで実際に過ごしたマナーハウスだ。



駐車場に車を止め、自然の遊歩道を歩いて下りながらマナーハウスを目指す。冬に訪問したため木々に葉はなかったが、春以降に行くとまた違っ



た光景を見ることがあるだろう。

ビジターレセプションに到着し、ナショナルトラストの会員証を提示する。ナショナルトラストの会員であれば、月額8ポンド（個人会員の場合）で500以上もの名所を無料で訪問することができる。無料で入場できる名所もあるが、建造物や景勝地の場合は有料であることが多く、名所によるが1回の入場に15ポンド以上かかるので、会員になればかなりお得にまわることができる。

会員証を見せて、係員に初めての訪問であることを伝える。マナーハウスとショップの行き方を教えてもらい、ヒューエンデンの地図もいただいた。ロンドンとは違い、人々の牧歌的な対応に癒されつつ、再びマナーハウスに向けて歩き出す。



駐車場から歩いて約10分。マナーハウスが見えてきた。ヴィクトリア朝時代ということもあり、色鮮やかな建物だ。

内装はほぼ当時のまま残されている。英国は、このような中世の建造物が内装をほぼ変えずに数多く残されており、日本では映画や教科書などで見ることができなかった中世の暮らしを気軽に見に行くことができるのも魅力の一つだ。古いものを大切にし、長く大事に使うことに価値を見出していく

いる英國人の慣習が如実に出ているのではないだろうか。



最初に訪れた部屋はベンジャミン・ディズレーリの肖像画が飾られた広間。クリスマスデコレーションの片づけ中で奥まで入ることができなかつたが、部屋の隅々まで当時の華やかさがそのまま残されていることに感銘を受けた。

ある部屋では衣装部屋があり、訪問者であれば衣装を着て写真を撮れるようだ。ただ見るだけではなく体験できる場所もあるのも遊び心があってよい。

しかし、このマナーハウスがベンジャミン・ディズレーリの邸宅以外にも使われたという歴史的背景がある。この建物は第二次世界大戦時の1941年に英国空軍に引き渡され、「ヒルサイド」と呼ばれる、戦時中極秘の地図製作の現場として隠されてきたのだ。





同じ建物内で全く異なる2つの歴史を垣間見ることができる名所は珍しい。写真の絵の左側がベンジャミン・ディズレーリの邸宅、右側が第二次世界大戦時に使われた部屋であることが示されている。

今まで見た華やかさとは対照的に、戦時中の物々しさが伝わる展示に変わり、置いてあるものもより近代的になった。実際にドイツの航空写真を分析して地図製作をした現場の部屋を見ることができる。

Osterley Park (オスター・パーク)

ナショナルトラストはもちろんロンドン市内にもいくつか所在しているが、次に紹介するオスター・パークは、車を持っていなくとも地下鉄で訪れることができる。

地下鉄ピカデリー線 Osterley (オスター) 駅。ピカデリー・サーカス駅より約30分にあるゾーン4の駅である。駅を降りて北へ歩くこと約10分。都会の喧騒が急になくなり、自然豊かな森に入り込んでしまった。ここがオスター・パークの入口である。

オスター・パークは、ジョージア様式のカントリーハウス（オスター・ハウス）を有した広大な公園であり、英国のドラマThe Crownのロケ

地の一つでもある。訪問当日はあいにくの天気だったが、ここは本当にロンドンかと思うほど緑豊かな場所で驚いた。どうやらロンドン内では周囲を緑で囲まれた田舎に現存する唯一の建物ということだ。



オスター・ハウスは一般公開されており、先述の通りナショナルトラストの会員であれば、無料で入場することができる。冬期間中はハウスおよびガーデンは11時から入場することができる。あいにくガーデンは花が咲いていなかったため、春の楽しみとして取っておこうと思う。

この建物は16世紀に建てられたが、18世紀後半、ロバート・アダム (Robert Adam) がチャイルド家 (Child) のために改装された歴史を持つ。様々なガイドブックや紹介文を読むと” Palace of Palace” という記述があり、直訳すると「宮殿の宮殿」という意味になるが、文字通り壯麗で美しい建物だった。

先に紹介した” Hughenden” 同様、昔あった栄光が今も輝き続いているような外観・内装で、高い天井、細かい彫刻、美しい絵画等、訪れる人をひきつける工夫がちりばめられていた。

また、オスター・パークはヒースロー空港に近



いこともあり、飛行ルートの真下に位置している。撮影当日は天気が良くオスター・ハウスと飛行機を同時に撮影することができた。カントリーハウスと飛行機。中世の建造物と現代の乗り物と一緒に見ることができる数少ないスポットと言っていいだろう。

最後に、オスター・パーク内で多くの野生の鳥がいた。パーク内に鳥の説明が書かれてあったり、ショップにはバードウォッチング用の双眼鏡、テノヒラサイズの鳥の図鑑、鳥の餌が販売されており、美しい自然の中でのんびり優雅に休日を過ごす英國人ならではの慣習だなと感じた。訪問日はバードウォッチングの時間はなかったが、次回訪問時に挑戦してみたいと思う。



ここまで、訪問した2か所のナショナルトラストを紹介した。他にもハリーポッターのロケ地として有名な「レイコック (Lacock)」や英國で有名な庭園の一つである「ヒドコート (Hidcote)」等、様々なスポットがある。これをきっかけに英国内の旅行に興味をもっていただけれどと思う。

余談だが、イングランド南東部ケント（といつもほぼサリーだが）にウィンストン・チャーチル (Winston Churchill) が愛した邸宅「チャートウェル (Chartwell)」がある。1922年に購入し以後40年に渡ってプライベートな時間を過ごした場所で、この場所もナショナルトラストに寄贈され、現在は当時の状態のまま一般公開されている。

この場所にも足をのばして入場を試みたが、前日までに降った雪の影響があり、ロンドン市内で一切積もっていなかった雪が、目的地に近づくにつれ白くなっていき、チャートウェルの駐車場に着いた時には2cmほど雪が積もっていた。

本来であれば、邸宅とガーデンの入場ができる日であったが、雪による転倒事故等防止により、臨時休業になってしまった。非常に残念ではあったが、南部であっても雪が降ることがあるといい勉強になった。春以降に邸宅の一般入場が再開されるので、リベンジしたいと考えている。



ジャルパック 上口直人